

説教 『道沿いの、真理と命』 山本 護 牧師
聖書 詩編 37:4~6 / ヨハネによる福音書 14:6~7

江戸前期の儒学者伊藤仁斎は、観念思弁に傾く朱子学(幕府官学)を批判して、「道とは人々が往来するところである」と言った。恭しく天に祀り上げられた孔子を、地の実学に取り戻したところが、プロテスタンティズムと似ている。また「仁」すなわち愛を尊ぶ、仁斎という号にも共感を覚える。

仁斎先生に喝破されて聖書を読むと、さああと地平が開けた。イエスは「わたしは道である(ヨハネ 14:6)」と語った。そうだった、イエスは「道」。だから私たちはそこを、「歩く」。さらにイエスは、自らを「真理であり、命である(14:6)」とも表明したが、これらも歩く道のイメージによって啓かれていく。

一般に「神」は、宇宙を統一する超越的な原理のように想像される。人間が神に関心を持つのが持つまいが、不動なるものとして存在する。しかしイエスの教えはそうではない。イエスを通して神へ至る場はまさに「道」であって、私たちがその道を自らの足で歩き、進んでいく途上で神なる方と巡り逢う。それでは道とは、仁斎先生が言うような人々が行き交う往来なのか。それは少し違う。

「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか(マタイ 7:13~14)」。森の径のごとく横に並んでは歩けない狭さ。混沌とした森、一人ひとりが各々に往く径。地図はなく、方向がかるうじて分かる程度。心細く、日暮には立ち留まる。しかしその道がイエスそのものであり、脅えてはならない。イエスは「私の軛は負いやすく、わたしの荷は軽い(11:30)」と言った。孤独な道は同時に清々しく、折々自分の事情に合った歩き方が認められる。罪なる重荷は、イエスが肩代わりして下さっている。

「わたしは道であり、真理であり、命である(ヨハネ 14:6)」。人間と無関係に厳然とある宇宙の法則ではない。私が道を往くことで味わうキリストという真理。命もまた、道を往くことで己が生命となるキリストの力。おずおずとでも、のびのびとでも、これはもう私が自分の足で進むより他ない道だ。

「あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている(14:7)」。自らに与えられた道を各々進んで、私たちは主体的に神と出会う。いや今、見ているイエス御自身が神そのものだ、と。そして今、神を見ているからといっても、それが終着点ではない。歩き続ける明日もまた、新鮮な心で神と巡り逢うだろう。生きている間も、死んでいる間も、やがて終りの日が到来するまで、私たちはキリストの道を歩み続ける。

イエスという道は、多くの者が行き交う往来ではない。また一列で黙々と進む尾根道とも違う。「あなたの道を主にまかせよ(詩編 37:5)」という感じかもしれない。イエスという道は、私の主体性によって往く道であり、それを「主に任せる」こと。「主に自らをゆだねよ(37:4)」も、自分を曲げ無理して主に近づくことではなく、主体的な「自ら」をそのまま「主のものとする」ことなのだ。

キリストは各々の人間の一つなる道。私たちには諸々の罪が否応なくあるが、それらを抱えたままキリストに委ねる道を往く。するとどうだろう。私たちに光が灯され(37:6)、闇夜でも歩きうる。



【おまけのひとこと】

キリストの道はどこでも続いている 誰かを待つことも 追いつく必要もない こつこつ歩き 疲れたら休む
自らの幻想に脅えて混乱せぬよう 深呼吸せよ はじめに吐いて それから吸って